

# 2011 年度 入学 試験 問題

## 国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、電算処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

— 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(50点)

ひとは最初に教えられたことを正しいと信じる動物である。

仮名遣を発音の規則だと信じて大人になったひとは、けっこう多い。それも、言葉に関心をもったひと、言葉に厳しいと自負しているひとたちにおおい。かれらは、言葉に関心をもつ、言葉に厳しいという自負がある、そのことをみずからに言い聞かせているから、この誤った思い込みは根がふかい。たとえば、「仰げば尊し」や「蛍の光」の歌詞を、「アオゲバ尊し」「さきくとはかりウタウナリ」と発音するのはいけない、と口うるさく言う国語教師がいる。いわく、「あれは、オーゲバ、ウトーナリと発音するのが正しいのだ。唱歌の歌詞の指導は、日本語を知らない若い教師には任せられない」と。

この教師がそういったことにこだわる根拠はどこにあるのか。考えられることは二つある。一つは、標準語でうたえ、ということ。もう一つは、本来の正しい日本語をつかえ、ということ。このうちのどちらかしか考えられない。実際には、この教師の頭のなかでは、標準語が正しい日本語で、正しい日本語とは標準語のことであると思われているだろうから、この二つは一つになっている。だが、厳密に言えば、この二つは問題の性質が異なる。そして、この二つは、どちらであるにしても、じつは、オーゲバやウトーナリと発音する根拠にはなっていない。

日本語の歴史をたどれば、オーゲバ、ウトーナリという発音は、江戸時代におこなわれていたものであった。つまり、限られた時代の、しかも下った時代の言語であり、現代日本語の標準語ではないし、ましてや日本語本来の発音でもないのである。そもそも「本来の発音」とは何なのだ。

そのことを、なるべくわかりやすい筋をたてて述べてみよう。

唱歌の歌詞を例にふくめていえば、平安時代の中頃まで、「仰ぐ」はアフグと発音していた。「尊し」はタフトシ、「歌う」はウタフ、「逢う」はアフと発音した。この時代、発音と仮名表記は一対一で対応していた。近代になってつくられた規範である歴史的仮名遣は、この時代の表記をもとにしている。「あふぐ」「たふとし」「うたふ」「あふ」と書くのは、そのためである。

これらの日本語音のうちのフは、はやくウに発音が変わった。日本語の語頭以外のハ行音はワ行音に変化した、この現象をハ行転呼という。「仰ぐ」はアウグ、「尊し」はタウトシ、「歌う」はウタウ、「逢う」はアウ、である。ここにアウ (aw) という連母音ができる。アウ連母音はやがて、オーと発音されるようになった。「仰ぐ」はオーグ、「尊し」はトートシ、「歌う」はウトー、「逢う」はオー、である。なんとも言うことだが、これらの変化は自然の変化である。地域差つまり方言のこまかい違いを考えなければ、江戸時代には上方も江戸も、これらアウ連母音はオーであった。

ところが、近代語研究家の飛田良文によれば、幕末から明治初期にかけて、東京方言では、これらのアウ連母音に変化がおきたという。語尾にアウ連母音をもつ元ハ行四段活用動詞、たとえばさきの「歌う」「逢う」などは、ウタウ・アウと発音が回帰するようになった。アウ連母音が元ハ行四段活用動詞の語尾でない語、たとえば「仰ぐ」「尊い」はどうかというと、アオグ・トートイである。つまり、「仰ぐ」は別の発音変化の道をゆき、「尊い」は回帰も変化もしなかった。

現代の標準語（あるいは共通語）は、明治初期の東京方言がもとになって形成された。であるから、「歌う」「逢う」は、ウタウ・アウが日本語の標準的な発音である。「仰ぐ」「尊い」はアオグ・トートイ、これが標準語である。そして、このように発音は変わっても、「あふぐ」「たふとい」「うたふ」「あふ」と表記する。この (1) の規則を「仮名遣」というのである。オーグと発音しようがアオグと発音しようが、またウトーと発音しようがウタウと発音しようが、歴史的仮名遣でそれらを書くなら「あふぐ」「うたふ」と表記しなければならない、現代仮名遣でなら「あおぐ」「うたう」。これが仮名遣の規則なのである。

オーグと発音しろ、ウトーと歌えというものは、仮名遣が (2) の規則だという基本的な勘違いから発しており、しかも現代日本語からは消滅した言語をつかえという、とんでもない要求なのである。

明治初期に発音が回帰したものもしなかったものも、また別の変化をしたものもしなかったものも、現在の普通の国語辞書にのっている見出しの表記が、標準語の発音を示している。なぜなら、国語辞書の見出しの表記はふつう現代仮名遣であり、現代仮名遣とは、原則として現代標準語音に忠実な表記体系であるからである。「仰ぐ」は「あおぐ」、「歌う」は「うたう」、「逢う」は「あう」と表記されている。これらの表記がすなわち、現代標準語の発音なのである。トートシが「とうとし」なのは、オ列

の長音にはオ列の仮名に「う」を添えると定めた、現代仮名遣という (1) の規則による。

したがって、「仰げば尊し」や「螢の光」を標準語でうたえというなら、アオゲバトートシ、ウタウナリと発音しなければならぬ。また、本来の正しい日本語をつかえといわれても、これだけ変化してきた言葉の、いったいどの時代の発音が、本来の正しい日本語だというのだろう。さきにも言ったように、オーゲバ、ウトーナリは、かなり下った時代の日本語、いわば、発音変化のなれの果てである。こんなのを本来の日本語というか。正しいとは、何をもって正しいとするのか。

「仰ぐ」をオーグと発音する根拠としてよくもちだされるのが、おなじ仮名遣の「扇ぐ」である。「扇ぐ」の連用形からできた名詞「扇」は現代語ではオーギである。これはアフグ↓アウグ↓オーグと変化してきた結果だから、おなじ仮名遣の「仰ぐ」も同様の变化をしたと類推できる。たしかに、類推の筋道としてはまちがっていない。だが、「扇ぐ」がそのような変化をしたからといって、「仰ぐ」までが同様の变化をしたかどうかは、实例を示さないかぎり確定できない。实例を示して、同様の变化が確認されたとすれば、それならなおさらのこと、「扇ぐ」が現代ではアオグなのだから、「仰ぐ」もアオグでないといけないという理屈になる。(3)。もしオーギの例だけで現代人が「仰ぐ」をオーグと発音するとすれば、それは架空の言語をつかっていることになる。

「オーゲバ尊しわが師の恩」「さきくとばかりウトーナリ」は、そう発音しなければならぬという根拠など、どこを捜してもない。けっして正しい日本語の発音ではないのである。

では、なぜ名詞の「扇」は現代語でオーギなのか。本体のアフグが右のような変化をしたのなら、「扇」もその法則にのって (4) が正しいのではないか。そう言うひとがでてくるかもしれない。だが、そういうのを、味噌も糞も一緒にする原理主義的思考というのである。すべての事物が法則にのつとるわけではない。「母」はハハであるが、前述のハ行転呼の法則にのつとれば、現代語の発音は「 (5) 」のはずである。だからといって、現代語「母」は (5) が正しくハハは誤り、などと言うか。

そういつてもナットクできない国語教師は、「じゃあ、正しい日本語はないのか」という。これへの答えは簡単である。

「自分たちが日常つかっている言葉、それが正しい日本語である」

法則を優先して、ありもしない(4) や (5) を正しいとし、日常で現実につかっているオーギ・ハハを排除するなど、正気の沙汰ではない。

それでもあえて合理的に説明しろというなら、それは化石として残ったのである。オーギはやくから名詞として定着し、動詞オーグがアオグに変わったときには、オーギの語源は人々の記憶から失われていたのである。そういった例、つまり本体の動詞は変化してもそのハセイ形(7)が変わらなかつたものは、現代語のなかに、捜せばおそらくけっこう見つけられる。「向こう(ムコー)」「逢瀬(オーセ)」「相撲(スモー)」「まごうかたなき(マゴウカタナキ)」などが思いつく。スモーなど、本体の動詞がスマウに回帰する前に、その動詞じたいが死語になっていた。スモーは化石として残るしかなかったのである。また、「相撲(スモー)」の語源は動詞スマフではないという説もある。こうなると、ホンセキ不明(8)のことは、どこにも回帰しようがなくなる。

これが固有名詞になると、意味上の語源と切り離されるのもつとケンチヨである。たとえば平安時代初期の源順(9)という学者の現代語での読みは「シタゴウ」であつて、シタガウには戻らない。さきの「逢瀬」は、いまでは若者の使用語彙でなくなつたが、ロマンチックな雰囲気復活するようになつて、おそらく語源も甦(よみがえ)つて、そのとき若者たちはアウセと発音するだろう。だが、わたしの知人の逢瀬くんまでアウセくんになる必要はない。

ひよこは生まれて最初に接したものを親と思ひこみ、それに甘え依存した行動をとる。人間も、最初に教えられたことを正しいと思ひこむ。これを動物行動学では「刷り込み」という。ひよこのばあいは、にわとりに成長したときには犬やごむまりが親でないことを学習しているらしいが、人間のばあいは、よほどの知的ショックをあたえてやらないと、そこから抜けだせない。

「仰ぐ」をオーグ、「歌う」をウトーだと勘違いしているのは、概して年輩の世代におおい。それは、かれらが子供のころ教室でそのように教育されたことにキイン(10)している。ただ、この程度の刷り込みなら、ふつうの人間の生活をしていけば、ひよこがにわとりに成長するように、「仰ぐ」はアオグ、「歌う」はウタウだということに気がつくものだ。あるいは、自然にアオグ・

ウタウと言って何不自由なく日常生活をおくるようになる。言葉についての内省が少ないひとほど、知識として刷り込まれた言葉は大きな意味をもっていない。だから、簡単に捨てることができる。知らないうちに捨てている。

ところが、言葉を専門にあつかう種類のひと、たとえば頭のかたい国語国文学者や国語教育者、あるいは言葉に厳しいと自負する文筆家は、そうはいかない。言葉に関する刷り込まれた知識は、そのひとにとって、ほとんど人格にも等しいから、それを容易に捨てきれない。日常生活ではアオグ・ウタウと言っている、心のなかでは、(11)、と思っている。かれらは、自分たちの日常つかっている言葉こそが正しい日本語だという、きわめて単純な原理に思い到らない。

「若い教師は日本語を知らない」と口うるさく言う教師は、じつはかれこそが日本語を知らないのである。ひよこのままでにとりになって、いまだにごむまりを親だと信じこんでいる、ものごとを相対化できない、かわいそうな国語教師なのだ。ひといちばい言葉に関心をもつと言うかれらが、言葉に関心をもつがゆえに、そういう刷り込みから自由になれない。ひとえに、仮名遣にたいする誤った認識を捨てられないからである。

(白石良夫『かなづかい入門』による)

〔問一〕 空欄(1)(2)に入れるのにもつとも適当な語句を本文中から探し出して答えなさい。

〔問二〕 空欄(3)に入れるのにもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 理屈はそうだが、事実はそれとは異なる
- B もちろん、理屈ですべてが説明できるわけではない
- C ただし、それは架空の言語があればの話である
- D 理屈だけでなく、事実もそうである
- E しかし、そんな理屈が通るはずがない

〔問三〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A アオギ      B アウギ      C オーギ      D アフギ      E オフギ

〔問四〕 空欄(5)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ハハ      B ワワ      C ハウ      D ハワ      E ワハ

〔問五〕 傍線(6)(7)(8)(9)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問六〕 空欄(11)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 唱歌は現代語の発音に従わなければならない、だからアオグ・ウトーと発音しなければならない
- B これはアオグ・ウトーが正しいのだ、アオグ・ウトーで意思の伝達ができなくなった今の世相が嘆かわしい
- C オオグ・ウトーという発音は標準語では誤りだが、唱歌の発音はアオグ・ウトーでなければならぬ
- D アオグ・ウタウは浮薄な若者の発音である、我々年配者はアオグ・ウトーと発音している
- E 自分はいつもアオグ・ウトーと発音している、アオグ・ウタウという発音はけしからぬ

〔問七〕 次の文ア、エのうち、本文の筆者の考えと合致しているものにはA、合致していないものにはBの符号で答えなさい。

ア 現代仮名遣といっても、現代の日常生活の発音と一致しているとは限らない。

イ 日本語の発音は過去の発音ではなく、現在の仮名遣に合わせるべきである。

ウ 現代仮名遣は江戸時代の発音に基づいたものなので、現在の標準語に合わせて変えるべきである。

エ 言葉を専門にあつかう人たちには、最初に習ったことが正しいと思い込んでいるために、誤った発音で話す人が多い。



二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

人間にとって、最も大切なものは何でしょうか。

「衣・食・住だ」という答えが、瞬時に返ってくるに違いありません。

しかし、その問いに対する答えは、世界の国々のすべてで同じというわけではありません。日本の中だけでも、人間にとって最も大切なものは「 (1) 」と言う人は少なくないと思います。ただ、その場の状況によっては、そういう答えをすることは気が引けるという気持ちになり、口にするのを遠慮してしまう人が多いのです。「 (2) 」という答えは、「なるほど」と思わせるかも知れませんが、「 (3) 」などという答えは、人前で言うには気恥ずかしいと思う人も多いでしょう。

極端と思われるでしょうが、日本とは非常に異なった社会での例を挙げますと、ニュージーニアの一部の社会では、人間にとって最も大切なものは、財産でも家柄でもなく「血液」だということなのです。なるほど、考えてみれば、これもまた人間の存在にとつて、最も大切なものではないでしょうか。その土地の男の中には、何かの機会に人前で自分の腕を切つて、血をドツと出して気前の良<sup>よ</sup>いところを見せる人物がいます。その行為は、日本での場合で言えば、数人の人と飲食を共にして、会計の時に気前よく奢<sup>ちぎ</sup>るといふ行為に匹敵します。

それでは、国や文化の違いとは関係なく、全人類にとつて共通する最も重要なものは何なのでしょう。言うまでもなく、それは「命」です。命抜きでは、人間について考えることは不可能です。それは死後のことになれば重要ではなくなるという訳でもありません。日本語で意味する「死後」でも、社会によつては、その人物は別の世界、あの世、天国などで生きていると信じられています。そこでは人の命は心臓が永久に停止し、脳波が止まってしまった後も続いているのです。したがって、そうした社会では、最も大事なもののの中に死後の「命」を含んでも、当然のことと考えられます。

「命」という根源的なものは別として、それでは地上のすべての人間にとつて共通の、最も大切なものは何でしょうか。それは「食べ物」と「性」と「休養」です。これらすべては、自然科学的な根拠から見たならば、 (4) に人間の生命を支える

ものであることでは「命」と変わりありません。重要なことは、各々の土地の人びとが「食べ物」や「性」や「休養」(5)ということなのです。そのあり方は社会ごとに、時代ごとに異なります。すなわち、個々の社会の伝統や道徳、宗教、等々に縛られた、極めて(6)なものなのです。

ある社会で「食べ物」であるものは、別の社会では気味悪くて避けるものでしかありません。ある社会では(7)である「性」のあり方は、別の社会に生きる人びとにとっては不道徳そのものでしかありません。ある社会では最も楽しいとされる種類の「気晴らし」や、「くつろぎ」も、別の社会の人びとの目には馬鹿馬鹿しいか、時間の無駄でしかないものであるとしか映りません。

これからお話しする「食べ物」の話では、注意しておくことがあります。内容は、(8)には個人的なことではありません。たとえば、「わたしはネギが嫌いだから、わたしにとってネギは食べ物ではない」と言う人が出てきます。それは、その人は個人的には間違つてはいません。しかし、ここでの話は、個人的な好き嫌いは別です。一般論としては、日本人にとってはネギは「食べ物」だと認めることが出来るということです。他方、日本では、猫やウジ虫は「食べ物」であるとは考えられていないという話なのです。「テレビのビックリショーで、トカゲを生(なま)で食べる人を見たから、それも食べ物と言えるのではないですか」などという質問を受けることが時々あります。ここでは、何万人、何十万人に一人という人物の例外的な趣味の話が主題となつていてはなりません。普通には有り得ない特別な経験談を披露するといふのでもありません。日本人は、米やキャベツやサンマは、意識的に考えずとも「食べ物」だと信じているというような、ごく当たり前の話なのです。それでも、そのことを少し深く考えてみれば、思いがけない発見もあるというものです。

食べ物の話を始めますと、どういふわけか個人的な好き嫌い、例外的な人物の趣味、異常な状況の中での行為などということと、一般論との区別が付かない人が、非常に多いことに気づきます。考えてみれば、そのことも「食べ物」が個人と密接に関係している大切な物だということの一つの証明であるとも言えるのではないでしょうか。

(西江雅之『食べる』による)

〔問一〕 次の段落を本文中に入れるとすればどこが適当か。もつとも適当な箇所を、その前の段落の終わりの五字で答えなさい。  
(句読点は一字に数えない)

何かが大切であると思うことは、生理学的な根拠に基づくというよりは、生まれてから身に付けた「文化」に重点を置く部分が多いのです。世界の如何なる土地であっても、人は、どの時代に生まれ、どの土地に育ち、何を聞いたり、教えられたりしたかに、大きな影響を受けます。

〔問二〕 空欄(1)(2)(3)に入れるのもつとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。ただし同じものを繰り返して用いてはならない。

- A 愛です                      B お金だ                      C 大切なものは家族です

〔問三〕 空欄(4)(6)(7)(8)に入れるのもつとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはならない。

- A 「文化」的                      B 基本的                      C 理想的                      D 物理的

〔問四〕 空欄(5)に入れるのもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A どのようにかかわり合うか                      B のどれに重点を置くか  
C を大切なものと思っっているか                      D の全てを欲している

三 次の文章は、藤原隆信の妻が幼い子らを遺して他界した後の様子を記したものである。これを読んで、後の問に答えなさい。

(30点)

幼き者どもの母、みまかりにしあはれさは、これに始めぬうき世の習ひとはいひながら、若くいはいけなかりしより、浅からぬさまにのみ思ひならはして、世の中のつつましきなどもあまた積もりぬる、行く末はるかならむことをこそもろともに言ひ契るほどに、目もあやにむなしく見なしつる悲しさは、うつつの心地もせずながら、限りある世の習ひなりければ、観音寺といふ方の山に送り置きて、五十日はやがてその山のふもととなる柴のいほりに明かし暮らすに、長月の二十日ごろなれば、やや冬の景色にもなる、嵐の音もいとどもの悲しくて、

(3)

しぐれの音はしたなく聞こゆるにつけても、漏りこむたもともまさりてのみ絞りかねつつ、かの山の上思ひやられて、

(5)

色を染むるにつけて、われこそ先立ちて着すべき色を、定めなき世の習ひと言ひながら、親子のよはひなる人に後らされて、かく染めつることも、なほ尽きせぬ心地して、

(7)

さるほどに、十月中の十日ごろにもなりぬ。この世にてはうち続き産などもしげく、みどりこ走り遊びなどして、何の世のこわりわきまふべくもあらざりしに、あしたごとに弥陀の名号を唱へ、経などを讀みつつ、月ごとの十五日には、仏の御前にて、人びとを勧めて一昼夜の念仏を唱へなど営みしことを、この十五日にもそのままに念仏を申さするに、その夜の暁方に、つゆばかりまどろみたる夢に、天人の姿なる人、うしろばかり見えて空へ登りぬるを、わが心に、この人と思ふほどに、歌を誦する声にて、「たうし切利天上」と長く聞こゆるに、きとおどろきたれば、この

(9)

に念仏唱ふる僧の声に聞きまがへつるを、

いとめづらかにおぼえて、僧を呼びて、「かの普賢品ふげんぼんには、当生たうしやう忉利天たうりてんじやう上とこそ侍るを、これはたうしと聞こえ侍りつるはいかに心得こころべきにか」と問ひ侍りしかば、「たうしと侍りつらんは至るといふ文字にこそ」と答ふるに、さらに涙こぼれまさりて、<sup>(11)</sup>めでたくあはれにおぼえて、

(12)

〔隆信集〕による

注 普賢品……法華經二十八品の第二十八「普賢菩薩勸發品」のこと。 忉利天……天界のひとつ。

〔問二〕 空欄(3)(5)(7)(12)には、それぞれ左のイ・ロ・ハ・ニの歌のいずれかが入る。もつとも適当な配列のものを左のAからFの

中から選び、符号で答えなさい。

- イ わがために君ぞ染めまし藤衣着るにつけても夢かと思ふ
- ロ 露をだに当てじと思ひし君をおきて聞くも悲しき山巡りかな
- ハ 頼みありてさだかに見つる夢をなほ深くぞ祈る思ふ余りに
- ニ 夜もすがら夢だに見せぬ風の音は送りし山のあらしなりけり

A	(3) … イ	(5) … ハ	(7) … ニ	(12) … ロ
B	(3) … ロ	(5) … ニ	(7) … ハ	(12) … イ
C	(3) … ハ	(5) … ニ	(7) … イ	(12) … ロ
D	(3) … ニ	(5) … ロ	(7) … イ	(12) … ハ
E	(3) … ハ	(5) … イ	(7) … ロ	(12) … ニ
F	(3) … ロ	(5) … イ	(7) … ハ	(12) … ニ

〔問二〕 傍線(1)「世の中のつつましさ」とはどのような意味か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 世間に対する気恥ずかしさ
- B 他人から憎まれるようなこと
- C 夫婦の間でも遠慮すべきこと
- D 現世においてひかえるべきこと
- E 社会の中で目立たぬような振る舞い

〔問三〕 傍線(2)「目もあやに」、(4)「はしたなく」の意味としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で

答えなさい。

(2) 目もあやに

- |         |           |          |          |          |
|---------|-----------|----------|----------|----------|
| A       | B         | C        | D        | E        |
| みるみるうちに | まばゆいほど美しく | 驚きあきれるほど | 目を見開いたまま | 涙があふれるほど |

(4) はしたなく

- |      |       |        |         |          |
|------|-------|--------|---------|----------|
| A    | B     | C      | D       | E        |
| 間が悪く | そっけなく | まんべんなく | 途切れ途切れに | 戸惑うほど激しく |

〔問四〕 傍線(6)「べき」、(8)「べく」、(10)「べき」の意味としてもっとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

い。ただし、同じものを繰り返し用いてもよい。

- A 推量
- B 意志
- C 可能
- D 適当
- E 命令

〔問五〕 空欄(9)に入れるのもっとも適当な語句を左の中から選び、符号で答えなさい。

- A うき世      B うつつ      C 山の上      D あしたごと      E 夢

〔問六〕 傍線(11)「めでたくあはれにおほえて」とあるがそれはなぜか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 僧の機転をありがたく思ったから  
B 妻との隔絶感に悲しくなったから  
C 亡き妻の極楽往生を確信できたから  
D 悟りの境地に至ることができたから  
E 夢の中で妻の姿を見ることができたから